

日本保健医療行動科学会

**HEALTH BEHAVIORAL
SCIENCE NEWS LETTER**

平成 22 年 11 月 15 日発行

第 73 号

発行 日本保健医療行動科学会
〒272-0021 千葉県市川市八幡 2-6-18-501
TEL:047-332-0726 FAX:047-332-5631
発行責任者 谷口文章
編集責任者 朝倉京子、川幡和子(事務局)
郵便振替 00170-2-2052
URL:http://jahbs.info/

**第 6 回国際保健医療行動科学会議 Sustainable Health Promotion:
Dialogue on Well-being and Human Security in Environmental Health を終えて**
大会長 谷口文章

《学際的対話》

9月19日～24日にマレーシア・マラヤ大学(クアラルンプール)にて、第6回国際会議を開催致しました。ラマダン(断食月)明けのハリ・ラヤ・プアサの祝祭期間と重なっており、マレーシアからの参加者が少ないことが懸念されましたが、休日にもかかわらず、多くの研究者、学生、臨床実践家が参席し、盛大のうちにこなされました。マレーシアは、マレー系・中国系・インド系、多数の先住民族からなる多民族国家です。それぞれの民族の宗教、信仰、文化が共生しながら、民族性や伝統文化が融合しています。そのような活気溢れる雰囲気のなか、"Sustainable Health Promotion: Dialogue on Well-being and Human Security in Environmental Health" について、学際的な対話が繰り広げられました。



会場 マラヤ大学法学部 ↑ オープニングセレモニー ↓



《参加者・発表数について》

日本、マレーシア、インド、インドネシア、英国、オーストラリア、ソロモン諸島、タイ、中国、ドイツ、ニュージーランド、ブラジルなど多数の国々からご参加いただきました。参加者は日本から 65 名、マレーシア側・当日参加・ゲストスピーカー 65 名、懇親会 59 名でした。3日間のべ参加者数は 358 名でした。3日目に行なわれました Morning Seminar & Educational Visit では、セミナーのあと HIV/AIDS 患者の子どもたちが暮らす Shelter Home (Rumah Solehah) を訪れました。44 名の方々が施設を訪れ、取組内容についてのお話を聴くとともに、子どもたちとの交流を楽しみました。

本会議中の発表件数については、口頭発表 28 件、ポスター発表 42 件でした。国際色、また学際性豊かなテーマが出揃い、非常に魅力的なセッション構成となりました。ヘルスプロモーション、ヘルスケア、ナラティブ、ヒューマン・セキュリティ、サステイナビリティ、スピリチュアル・ヒーリング、伝統医学、CAM、グローバルヘルス、HIV/AIDS・マラリヤ・デング熱などの感染症への公衆衛生や社会的サポートなどについて幅広い分野から熱心な対話が交わされました。またポスター展示の会場でもサロニックな雰囲気のなか、発表者と参加者の間で情報交換や議論が深められました。



シンポジウム

《テーマ Sustainable Health Promotion と企画について》

ヘルスプロモーションでは、健康の前提条件として、平和、住居、教育、食糧、収入、安定したエコシステム（生態系）、持続可能な資源、社会的正義と公正性があげられます。21世紀の環境と生命をめぐる問題群と対置させてみると、グローバリゼーションを背景にした社会的・経済的格差の問題が浮かびあがってきます。各地域やコミュニティを活かしながら「健康を支援するための環境づくり」をどのように行なっていくか。私たちの身近にあるローカルな問題と地球規模で生じているグローバルな問題が、“グローバル”にどのようにつながるのか、について再確認が必要となっています。

2日間にわたる本会議やセッション、モーニング・セミナー・研修ツアーを通じて、ヘルスプロモーション、サステナビリティ、ウェルビーイング、ヒューマン・セキュリティについて対話が重ねられました。またダイアログ・セッションでは、「宗教的催眠療法」「ユナニ医学」「ナラティヴ・アプローチ」のテーマがとりあげられ、理論と実践の融合化がはかられました。会議の3日目は、午前中にマレーシア・日本における HIV 感染予防・治療・ケアに関するセミナーが行なわれ、その後 Rumah Solehah を訪れました。



ポスターセッション



ダイアログ・セッション

《現地調査研修ツアーについて》

現地調査研修ツアーは、今回はじめて企画した催しでした。ジョホール州エンダウ・ロンピン国立公園を訪れ、その地域に居住する Jakun People のライフスタイル、伝統文化、民間療法、宗教儀礼に関するワークショップに参加（参加者数 28 名）しました。またツアー中にはトレッキング、ナイトクルーズなどのフィールド・アクティビティを交えながら、自然の豊かさ、生物多様性を実感しながら、Jakun People のライフスタイルを経験することができました。

《最後に》

本会議を通じて、各専門領域の研究者や臨床実践家の方々から、本会のような国際アカデミーを創設したいとの強い要望がありました。国際的なパートナーシップの拡がりに向けて、また日本保健医療行動科学会がどのように世界に情報発信し、研究交流を深めていけるのかも含め、今後さらなる国際的な活動が期待されています。

本大会の開催までに実行委員の先生方をはじめとする多くの方々にサポートいただきました。この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。先駆的な研究や実践をご披露いただきました先生方、また連日朝早くからご来場いただきディスカッションに加わっていただきました参加者の皆様のおかげをもちまして、成功裡のうちに本会を終えることができました。

マラヤ大学 Centre for Civilisational Dialogue 所長 Prof. Dr. Datin Azizan Baharuddin 先生、昼夜問わず献身的にサポートしてくださった CCD スタッフの方々には、会議の準備運営・進行に亘り、大変お世話になりました。最後に京都大学 GCOE プログラム「アジア・メガシティの人間安全保障工学拠点」からファウンドをいただき、会務を円滑に遂行できましたことを、心より感謝申し上げます。



現地調査研修ツアー

第6回国際保健医療行動科学会に参加して

山手 美和（聖路加看護大学大学院博士後期課程）

第6回国際保健医療行動科学会が2010年9月19日～21日までマレーシア・クアラルンプールにて開催された。学会に参加して、今回のテーマでもある“Sustainable”について考えた。“Sustainable”であるためには、そこに「いるもの」同士がそれぞれの文化・価値を尊敬しあい、存在しうる環境の中で対話することで、新たな文化・価値を創造する。そして、環境との調和を図ることで、さらなる発展（“持続可能”）につながっていくのだろう。「我」のことだけでなく、同じ世界に「いるもの」を「尊敬」しあうことが基盤となっていることを改めて考えさせられた。

また、学会を振り返ると、「通常の学会」では味わえない経験が多々あったように思う。中でも印象深かったのは Rumah Solehah である。親を HIV/AIDS で亡くした子ども達のためのホームであり、親が HIV/AIDS という病気であることで精神・社会的な苦痛を感じていることも多いかもしれない。未来を担う子どもたちがどのように生きていくのか、大きな課題であるように感じた。

オプションツアーで訪れた Endau Rompin National Park では、ナイトクルーズやトレッキングで自然の偉大さに触れ、私たちが生きている地球環境について考えさせられ、また Jakun 族の文化を垣間見ることができ、興味深いものであった。Jakun 族の folk medicine や religious initiation に触れ、「最先端」のものを追い求めていきがちな日本人の風潮の中で、伝統文化を守りつつ生きることの重要性も再認識した。

今回の学会に参加し、人間が生きていく基盤として、「価値・文化」「尊敬」「対話」「調和」という大切なキーワードを学んだ。